

Sumitomo Foundation News Vol.26

基礎科学研究発展への貢献を目指して

1991年に住友グループ20社により設立された住友財団は、今年創立35周年を迎えます。基礎科学研究助成は、初年度から実施しているプログラムで、今年度までに2,912件、累計50億円余りの助成を行ってきました。

若い頃に住友財団の助成を得て、その後大きな研究成果に繋げられた研究者の方々は多くいらっしゃいます。昨年、北川進先生がノーベル賞を受賞されましたが、財団の助成対象者からのノーベル賞受賞者は、現在評議員をお願いしている山中伸弥先生に続き、2人目の快挙となりました。

財団の助成対象者によるノーベル賞受賞

氏名	助成時所属	助成年度	助成金額	テーマ	ノーベル賞受賞年度
山中伸弥	奈良先端科学技術大学	2000	200万円	翻訳因子eIF4Gの相同体NAT1が細胞分化に必須の遺伝子転写を制御する分子機構	2012年
北川進	東京都立大学	1997	200万円	外場応答機能を有する新規多孔性配位高分子の創製	2025年

北川先生も、受賞後のインタビューで、「新しいことへの挑戦と成果までの長期の支援継続が必要」とおっしゃっています。科研費をはじめとする国による支援を受けるには、どうしても実績が必要となる面があります。いまだ成果が出ていない若手が新しい研究に挑戦することに対して助成を行えるのが、民間財団の利点であり、民間財団としてやるべきことなのだと思っています。

住友財団の基礎科学研究助成は、今年度より総額を5千万円増額すると共に、年齢制限を明確化して若手を重視することや、いま流行の研究ばかりが重視されないように、各分野へ均等に助成金額を配分するなど、いくつかの改革を実施しました。

基礎科学研究助成の主な変更点

これらの改革は、すぐに成果が出るものではないと思いますが、住友財団の助成が日本の基礎科学研究の発展に少しでも貢献できるように、支援を継続していきたいと思っています。

項目	変更前	変更後
助成金総額	1億5千万円	2億円
対象年齢	若手	45歳以下
分野毎の助成金額	概ね応募数に比例して配分	各分野に均等配分(除く数学)
助成金額	減額査定を実施	申請金額通り(減額査定せず)

主な活動内容 (2025年11月～2026年1月)

11月	国内外文化財維持・修復事業助成 ならびに 修復文化財展示事業助成 募集 (10月～11月) アジア諸国における日本関連研究助成 選考・専門委員会打合せ実施
12月	国内外文化財維持・修復事業助成 ならびに 修復文化財展示事業助成 第一回選考委員会開催
1月	アジア諸国における日本関連研究助成 選考委員会開催

修復文化財展示事業助成

2024年度に新設された修復文化財展示事業助成は、初年度4件の事業が採択されました。そのうちの1件は住友財団ニュース第24号(2025年10月)でご紹介しましたが、この間に2件の展覧会が開催されましたのでご紹介します。

1. 京都文化博物館「未来へのおくりもの 京都府×京都市指定文化財」展 (2025年9月27日～11月24日)

京都府および京都市の指定文化財を紹介する中で、修理が施された文化財にスポットをあてるという企画の展覧会です。前後期合わせると20件の指定文化財が出品され、住友財団による修復文化財についても4件が展示されました。

関連イベントのギャラリートークでは、京都府および京都市の文化財保護の担当者が複数会場に来て、指定文化財や修理について臨場感のある解説が行われました。

また、シンポジウム「文化財、修理と指定の現場から 彫刻編」では、「木造彫刻の文化財修理について」をテーマに修理技術者の方が講演されるとともに、実際に木造彫刻の修理に使用される道具や各種木材片が会場に持ち込まれて展示されるなど、文化財修理への関心を高める内容が充実していました。



シンポジウムの会場の様子

*展示された住友財団助成の修復文化財

- 棚に草花文様打敷(真珠庵所蔵)<京都府指定> ○木造彩色宝珠台(海住山寺所蔵)<京都府指定>
- 報恩寺本堂障壁画(文麟筆) <京都府指定> ○狩野元信筆「鄧林宗棟像」(龍安寺所蔵)<京都市指定>

2. 京都産業大学ギャラリー特別展「重要文化財 賀茂別雷神社文書の世界—その歴史・文化・修理—」 (2025年10月20日～12月6日)

賀茂別雷神社文書は、平安時代から近代にいたる古文書と日記・記録類13,639点からなる史料群で、その修復は、2009年から今日まで継続的に行われています。住友財団は当初から継続して助成を行ってきました。

賀茂別雷神社(通称、上賀茂神社)と京都産業大学は立地が近接していることもあり、文化・地域活動など多岐にわたり連携しており、この特別展も、京都産業大学創立60周年記念として企画されました。数多くの賀茂別雷神社文書の中から、修復された資料を中心に、織田信長や豊臣秀吉など歴史上の有名人物にかかわる文書などがピックアップされ、前後期合わせて36点が展示されました。

会場には、古文書の修理を解説したパネルが掲示され、修理道具の展示や修理の様子を解説したビデオの放映もされていました。また、修理にかかわるイベントとして、「岐路に立つ文化財の保存と修理～選定保存技術と用具・原材料」および「文化財を守り伝える～重要文化財 賀茂別雷神社文書の修理を中心に」と題する2つの講演会が日を分けて開催され、後者はWebでの同時配信も行われました。



会場に掲示されたパネル



会場でのビデオ放映

住友財団による展覧会開催

住友財団は、財団の助成によって修復された文化財の展覧会を公益財団法人泉屋博古館との共催で開催しています。2025年4月に泉屋博古館東京で開催した展覧会が最初になりますが、今後も継続的に開催し、修復文化財展示事業助成による展示がかなわなかった文化財なども含めて、多様な修復文化財を展示していきたいと考えております。また、展覧会では、文化財の保存修理という面を取り上げ、文化財の価値だけでなく、その保存修理を行うことの意義や重要性を理解いただけるような特色を出していきたいと考えております。2026年度は、泉屋博古館東京での2回目の展覧会に加えて、展示件数を大幅に増加した大規模な展覧会を京都の泉屋博古館でも開催しますので、ここで紹介させていただきます。

1. 住友財団文化財維持・修復事業助成の成果展示 文化財よ、永遠に 2026 一次代につなぐ技とひと (2026年4月4日～6月28日) 於:泉屋博古館

昨年リニューアルオープンした京都の泉屋博古館での展覧会になります。約30件の修復文化財を3期約3ヶ月間を通じて、一部入替えを行いながら展示します。

財団の助成は美術工芸品全般を対象に、指定文化財であるか否かを問わず行なっていますが、展示作品はそれを反映したものとなっており、様々な分野の作品がご覧いただけます。

また、修復文化財の展示に加えて、その修理に関する技術や材料、道具を紹介するとともに、修理に携わった人々とその努力も紹介することで、修復文化財に特化した展覧会としての特徴をこれまで以上に体感いただけるようにしたいと思います。

さらに、文化財の保存修理に関するイベントも色々と企画しているところです。その一つとして、文化財維持・修復事業助成の選考委員でもある奈良大学学長 今津先生の記念講演会を4月11日(土)に開催の予定です。



2. 住友財団助成による文化財修復成果 – 文化財よ、永遠に 2026 (2026年4月25日～7月5日) 於:泉屋博古館東京

○展示作品

①前期(4月25日～5月31日)

木島櫻谷の写生帖(京都府京都市 櫻谷文庫所蔵)

②後期(6月2日～7月5日)

・夢窓国師墨跡「果山」(岐阜県土岐市 崇禪寺所蔵) *右の写真(上)

・此山妙在墨跡(岐阜県土岐市 崇禪寺所蔵)

・初音蒔絵火取母(神奈川県鎌倉市 東慶寺所蔵) *右の写真(下)

○見どころ

・明治後半から昭和初期の京都を代表する日本画家である木島櫻谷の残された膨大な写生帖の中から重要性、修復の必要性が高いものが修復され、その一部が今回展示されます。

・墨跡の2点は、臨済宗妙心寺派の寺院である崇禪寺に伝わるもので、禅宗史における重要人物の筆になる南北朝時代の貴重な作品です。

いずれも紙本墨書ですが、修理時の調査で本紙の紙質は異なるものであることがわかっています。岐阜県以外で初の展示になります。

・初音蒔絵火取母は、源氏物語の初音の帖に意匠をとった蒔絵を施した香炉です。室町時代の作とされ、重要文化財に指定されています。

胴径15cm弱の小さな作品ですが、事前調査を含め約2年をかけ慎重に行われた修理の過程についても注目いただけるものと思います。



アジア諸国における日本関連研究助成

『本プログラムの申請・採択情報に見る特徴とその歴史的変遷』レポートの作成

住友財団では、設立以来 本プログラムを通じて、アジア諸国における研究者に対する支援を行ってまいりました。2024年度迄の応募総数は11,833件に達し、そこから選考を経て1,947件 約14億7,700万円の助成を実施しました。この30年あまりで、アジアを取り巻く環境は大きく変化しており、アジア諸国の研究者が実施する 日本研究についても変化が見られます。過去の応募・採択データを分析することで、日本関連研究の変遷がみられるのではないかと考え、元選考委員である東京大学園田茂人教授に委託し『アジアにおける日本研究－住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」の申請・採択情報に見る特徴とその歴史的変遷』と題するレポートを作成いただきました。

レポート全文はこちらから ⇒ https://www.sumitomo.or.jp/pdf/jare/report2025/JapaneseStudiesinAsia_Report_ja.pdf

要旨は次のとおり：

1. 国際交流基金の調査によれば、日本語学習者の76%以上が東アジア・東南アジアに集中しているが、日本研究に関してはその存在感が十分認識されていない。一方、中国では日本研究者数が米国を上回り、日本研究機関も118に達するなど、世界有数の日本研究大国となっている。
2. 当プログラムのデータ(1992~2024年)を分析し、アジアの日本研究の動向を把握した。申請数は2014年以降急増し、特にマレーシアとインドネシアからが顕著で、東アジアから東南アジアへの重心移動が進んでいる。研究テーマは「日本単独」よりも「自国との比較」や「交流・関係」に焦点を当てるものが多く、実践的・現代的課題への関心が強い。人文系の比率は低下し、社会科学や技術・環境など自然科学寄りの領域が増加。現代を扱うテーマが86%を占める。採択案件では、日本語利用率が高く、人文系・歴史系の質が高い。アジアの日本研究は再生産が進み、今後は南アジアや中央アジアからの拡大が予想され、日本の研究者との対話が重要である。

2025年度 申請応募状況

2025年度の応募は昨年10月末に締め切りました。応募数は1,256件で前年比365件もの増加となり、申請金額は約18億9,500万円(前年比5億7,400万円増)と何れも過去最高となりました。国別ではマレーシアからがトップで523件(同74件増)、続くインドネシアは434件と前年155件の2.8倍もの応募となり、両国で全体の3/4を占め、中国からの73件(同変わらず)、タイ45件(同12件減)、ベトナム35件(同7件増)と続きます。また、韓国、台湾からの応募はそれぞれ32件(同8件増)、30件(同7件減)とコロナ禍前のレベルに回復したことに加え、インドからも22件(同16件増)、そしてブータン(2件)とカザフスタン(1件)からは同国から初となる応募がありました。

現在、計14名の専門委員による一次審査を通過した申請を、2名の選考委員が最終審査を進めており、3月の理事会にて助成対象が最終決定される予定です。

